



TITLE:

IX.NBRの活動

AUTHOR(S):

松林, 清明

CITATION:

松林, 清明. IX.NBRの活動. 霊長類研究所年報 2007, 37: 105-106

ISSUE DATE:

2007-07-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166455>

RIGHT:

VIII. サル所外供給（有償）事業

従来共同利用研究の一環として行っていた「サル所外貸与」を廃止し、平成 17 年度より有償の「サル所外供給」を開始した。平成 18 年度は、平成 17 年度に決定した 1 申請者に対してコモンマーモセットのオス 2 頭の供給を行った。

平成 18 年度サル所外供給委員会：M.A.Huffman(委員長)、景山節、友永雅己、大石高生
(文責：M.A.Huffman)

IX. NBR の活動

ニホンザルバイオリソースプロジェクト (NBR)について

本プロジェクトは、第一期として予定された 5 年間（2002 年度～2006 年度）の最終年度として、一応の区切りを付ける年となった。ゼロからスタートして母群収集や繁殖を進め、本格的な供給事業に向けての試験的供給として、期末までに第一回の供給試行を実施することができた。

第一回の供給試行については平成 18 年 3 月末に募集を開始し、供給検討委員会の審査、運営委員会の承認を経て供給先を決定し、同年 12 月に輸送を完了した。供給したサルは本プロジェクトの委託を受けている民間企業で繁殖したものである。この供給申請に際して義務付けている事前講習を 2 回開催し、のべ 138 名が受講した。

本プロジェクトの委託を受けている霊長類研究所は、繁殖規模を大幅に拡充するリサーチリソースステーション（RRS）の設置を概算要求していたが、後述するように 18 年度にその実現をみた。今後はその運営によって繁殖事業の一翼を実際に担うこととなる。

また、NBR の活動を広く紹介するために、18 年度もシンポジウムを開催した。内容は以下のとおりである。

第 5 回 文部科学省 RR2002 企画シンポジウム

「ナショナルバイオリソースプロジェクト「ニホンザル」 - 将来へ向けて、5 年間のあゆみ - 」

日時：2007 年 2 月 2 日（金）

場所：日本大学会館第 2 別館

主催：ナショナルバイオリソースプロジェクト「ニホンザル」バイオリソース運営委員会

（中核機関：自然科学研究機構 生理学研究所

代表者：伊佐正）

後援：京都大学霊長類研究所、情報システム・研究機構
国立遺伝学研究所、独立行政法人 理化学研究所バイオリソースセンター、日本霊長類学会、日本神経科学学会、日本生理学会、国立大学法人動物実験施設協議会、公私立大学実験動物施設協議会

<プログラム>

開会挨拶 「ニホンザル」バイオリソース運営委員会・委員長 伊佐正

来賓挨拶 文部科学省（ライフサイエンス課長）

NBR5 年間の総括と将来展望

NBR の 5 年間と将来展望 「ニホンザル」バイオリソ
ース運営委員会委員長 伊佐正
京都大学霊長類研究所 RRS 計画
京都大学霊長類研究所 景山節
質疑応答

第 2 部 ニホンザルについて

特性 山根到(日本大学総合科学研究所)

研究紹介 虫明元(東北大学)

質疑応答

動物実験を取り巻く環境

動物実験を巡る環境 青木貢一(動物との共生を考え
る連絡会)

動物実験の社会的理解に向けた取り組み 八神健一
(筑波大学)

総合討論

これまでの第一期 5 年間の実績を踏まえ、19 年度
からの第 2 期ナショナルバイオリソース事業に応募し
た結果、採択が決定した。今後の 5 年間に事業を軌道に
乗せ、ニホンザルの飼育下繁殖・供給を研究基盤として
定着させることが求められる。

(文責:松林清明)

X. 第二キャンパス

霊長類研究所リサーチリソースステーショ ン(RRS)建設について

17 年度予算で概算要求が認められていた RRS が、
18 年度末に完工し、霊長類研究所の第 2 キャンパスと
してオープンした。研究所東約 2 km の小野洞地区の借
地およそ 10 ヘクタールに 3 式の放飼場、管理棟、育成
舎、排水処理施設、調整池などを備え、数百頭のニホン
ザルを群で飼育して、多様な研究や繁殖を行う施設であ
る。自然の地形や樹木をそのまま生かして豊かな飼育環
境とし、野生に近いサル生活を再現して霊長類研究の
新たな展開を可能にするとともに、前記 NBR 事業に必
要となるニホンザルの繁殖も担うものである。狭隘とな
った官林キャンパス以外の場所に、新しい価値を持った
サル類の大規模飼育施設を建設したいとの構想は 10 年
越しのものであった。この間、いくつかの候補地につい
て検討、交渉を重ねてきたが、研究所の至近の地に実現
の運びとなったことは、研究利用のうえでも管理面でも
最適な結果となった。実現に至るまでの間、関係諸学会
や NBR 委員会から各方面に要望書を出していただくな
どのご支援があったことが大きな推進力となった。

自然公園法、都市計画法、砂防法、森林法などの諸
規制がかかった地域であるため、それらをクリアする動
植物調査などに時間を要したが、犬山市などの支援を得
て認可を受け、無事に開所式を迎えることができた。ギ
フチョウの繁殖地であり、食草のカンアオイの移植作業
から始める異例の工事となったが、1 年後の 19 年春に
は移植先での産卵も確認された。RRS 用地は農業用ため
池の水源の一部にもなっていることから、排水の処理に
ついては検討を重ねた。管理棟や育成舎からの排水は汚
水処理の後、放飼場雨水と一緒に 1500 トンの容量を持
つ排水貯留槽に溜め、放飼場へポンプ圧送して樹木に灌
水する方式として、場外へ出さずに処理することとした。
その他の雨水は調整池を経てため池に放流される。

また、現地での水質・騒音・臭気などを定期的に測
定するほか、近隣の市民にも環境モニターを委嘱して月
2 回の報告を受け、これらを毎年持ち寄って住民参加の
検討会議を開くことにしている。地元との密接な協力関
係を維持することは施設の存続にとって必須である。

RRS の建設に先立って平成 15 年度に建設した試験
放飼場(第 4、第 5 放飼場)での飼育実験を重ねてきた
が、フェンスの設計やサル捕獲方法などは基本的にこの
試験的開発で得た知見を基にした。ただ、18 年度に動
物の愛護および管理に関する法律が改正され、特定動物